



ベラルーシのチェルノブイリ被災地に向けて出発！ チェルノブイリとフクシマを結んで… 支援とメッセージを届けてきます

今年も皆さんから寄せられた支援カンパやメッセージを届けに、ベラルーシの被災地を訪問します。12月4～12日と、駆け足の訪問ですが(日程は別表)、例年どおり、ミンスクのマリノフカ地区の「移住者の会」、モギレフ州の汚染地クラスノポリエ、チェリコフ、ベリニチで、学校、幼稚園、病院、障害者センターなどを訪問してきます。

今年の4月にはクラスノポリエのベーラさん(小児科医)とチェリコフのバーリャさん(元教師)に来日していただき、一緒にフクシマ原発事故の被災地を訪問しました。その時に交流をした飯舘村から福島市内に避難されているお母さんたちのグループ「いいたて子どもを守る会」と、その支援に取り組むNGO「エコロジー・アーキスケープ」の皆さんが、最近開催した「お絵描き会」-Tシャツに「わたし(ぼく)のなりたいもの」をふくらむ絵の具で描く-の様子や出来上がったTシャツの作品の写真を「ベラルーシの皆さんによろしく」「福島の子も達がたくましく生きている様子が伝わると嬉しいです。」と、託してくれました。チェルノブイリとフクシマを結んで、子どもたちの未来につながる交流のきっかけになれば…と思います。

チェルノブイリとフクシマは、いずれも何百万人もの人々が、長年にわたる放射能汚染と闘いながらの生活を余儀なくされる「原発重大事故」です。「フクシマのこれから」に「チェルノブイリ」の教訓を活かすためには、両者の類似点と相違点(社会体制、事故後対策の経緯、医療制度や診断基準、教育制度、等々の違い)をリアルに把握し、正しい情報と評価に基づき、今後の健康影響やリスクを推定したり、見習うべき対策と繰り返してはならない失敗な



「ぼくのなりたいもの」宇宙飛行士、サッカー選手

どを学んでゆく必要があります。そのような視点から、改めて被災地の皆さんに、いろいろと話しを聞いてきたいと考えています。今回は、ミンスクの甲状腺専門病院も訪問し、現在、福島県で行われている「県民健康管理調査」の甲状腺超音波検診の結果などについても、ベラルーシの医師らと意見交換してくる予定です。汚染地クラスノポリエでは、農業や林業関係の施設なども訪問してきたいと考えています。また、学校では、子どもたちを被ばくから守るためにどのような教育がなされているのかなど、より具体的に聞いてきたいと思えます。

12月16日「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西 発足21周年の集い」で「現地訪問報告」を行います(案内は8頁)。そして、チェルノブイリとフクシマを結んで、核被害と闘い、命と健康と生活を守り、「核被害のない世界」をめざす活動が続けるために、皆さんと話し合いたいと思えます。

12月16日「発足21周年の集い」にご参加下さい!

また、チェルノブイリとフクシマ支援カンパにも引き続き、ご協力をお願いします!

事務局:振津かつみ

《現地訪問予定》

12月4日:関空発、夜10時過ぎにミンスク着

5日:ミンスク:甲状腺専門病院訪問、マリノフカ「移住者の会」との交流など

6日:ミンスク:バザー用品買い出し、クラスノポリエ移動

7日:クラスノポリエ

(区長や教育長表敬訪問、学校、幼稚園、障害者センターの他、
できればコルホーズや森林関係、事故処理担当部門など訪問)

8日:クラスノポリエ:同上

9日:クラスノポリエ:滞在中にチェリコフにも日帰りで訪問

10日:ベリニチ:寄宿学校、ミンスクに戻る

11日:ミンスク発

12日:帰国



カンパ・会費の納入ありがとうございました!!

2012. 10. 14~2012. 12. 5

渡辺義郎 斎藤由佳 染木富美代 松本郁夫 ダンスコアポッシブル Pカンパニー 江端久美子
折口春夫 田原良次 小林幸子 斎藤美智子 井上和歌 大田美智子 且保立子 藤田達 鎌田妙子
小谷勝彦 小谷美智子 住吉純子 佐藤大介 久保きよ子 鎌橋照子 木下佳子 吹夢キャンプ
猪又雅子 (順不同・敬称略)

大阪府立美原高校 国際交流大バザールに参加

久保きよ子

毎年 開かれる国際交流大バザールも今年で15回目となりました。

昨年は、どしゃ降りの雨に見舞われ残念な思いをしました。今年は期待していたのですが、11月23日のこの日も昨夜からの雨が残り、時々降るといったあまりうれしくない天気でした。

しかし、出店した品物は、近年になく大売り上げとなりました。

チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西のブースに置かれているベラルーシグッズが、よく売れました。

26年前のチェルノブイリ原発事故から現在までの被災地ベラルーシとの交流パネルと、昨年、東電が起こしたフクシマ原発事故のパネルを特別展示しました。

高校生の中には「ロシア語に関心があると」パネルをしっかりと読んでくれる人もいました。マトリョーシカやベラルーシグッズにも深く興味を示していました。

小学生から高校生の子どもたちには、特にマトリョーシカが大人気で、たくさん売れました。

保護者や先生方には、文科省の放射線副読本の内容が、問題である、少々の被ばくは、健康に影響がない大丈夫だと大ウソ宣伝していることを「文科省の副読本を撤回してください」の署名を持って、訴えました。「子どもたちのいのちと未来のために学ぼう 放射能の危険と人権」の本も多数買っていただきました。

国際交流大バザールを紹介しておきましょう。

今年のテーマは、「モンゴルー大草原の風の調べにのって!」です。馬頭琴(ばとうきんー「馬頭琴とは、モンゴルの遊牧民の間に古くから伝わる、二弦からなる擦弦楽器。弦は馬のしっぽの毛を束ねてできていて、やはり馬の毛を張った弓で弾く。」) 揚琴(ようきんー「楊琴とも書く。中国語では(ヤンチン)。打弦楽器の一種であり、西方から伝わり中国の伝統楽器となっている。」、ホーミー(アルタイ山脈周辺民族の間に伝わる喉歌と呼ばれる歌唱法のうち、西部オイラト諸族《モンゴル国西部と中国新疆ウイグル自治区北部に居住》に伝わるものの呼称。一般に、緊張した喉から発せられる。)など、モンゴル民族音楽の演奏がありました。

美原高校吹奏楽部、軽音楽部、ダンス部、の演奏やダンス、最後には大阪教育大のエイサー隊で盛り上がりました。

模擬店では、モンゴル料理、韓国のチヂミ、タイの汁ビーフン、スリランカのカレー、トルコのアイスやサバブ、ベルギーのワッフル、フィリピンのマハ・ブランカ(ひんやり冷やしていただくとしても夏らしいアジアの香り漂うスイーツ)、ケニアのチャイ(茶を意味する言葉。狭義には、インド式に甘く煮出したミルクティーを指す。世界的には、茶葉に香辛料を加えたマサーラー・チャイを指す)、スリランカの本格カレー、その他いろいろあって、本当に幸せを感じ、おなかいっぱいになりました。



1986年4月26日 チェルノブイリ原発事故



恒例「反核フェスティバル」開かれる！！

2012年の大阪長居公園の「反核フェスティバル」は、24団体27ブースの参加で、10月14日に行われました。正式名称は「戦争はいやや！核なんかいらへん！反核フェスティバル」ですが、焦眉のサブテーマ「NO!チェルノブイリ NO!フクシマ」の横断幕を舞台下にかかげました。

初めての10月開催でした。例年のように暑さや台風に苦しめられることなく、さわやかな風のもと、公園を散策するお客もやや多く、「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」専属パティシエ田中のケーキは完売。コーヒーもよく売れました。ベラルーシ産のマトリョーシカも目を引いていました。チェルノブイリ・フクシマをテーマにパネル展示も行いました。隣で大がかりな「東住吉区民まつり」が重なっており、色々な人が見に来てくれるきっかけになっていたかも知れません。

今年は「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」の代表で「反核フェスティバル」の代表でもある長崎被爆者の山科和子さんが初めての欠席となり残念でした。が、きな臭いこの時代「継続こそが力なり」です。いつものように、人手不足ですが「何としてもやらないと！」と猪又さん、助っ人の稲岡さんとバタバタ準備しました。寺岡さんも初めから店番を手伝ってくれ、遠い京都からも「ゴーゴーワクワクキャンプ」のメンバー杉本さん達が手伝いに来てくれました。店番・展示に大助かり。舞台にも上がって「ゴーワクキャンプ」の取り組みもアピール。元気をもらいました。



反核フェスの目的:平和・人権・環境の問題を考え、子ども達に核も戦争もない未来をわたすことは、地球に住む私たち全員の実践です。3.11以後は特に日本で核の危険性を考えない人は誰もいないでしょう。しかし、今年からは公務員は反核フェスティバルに公式に参加したり司会をしてはいけなくなったそうです。(地方自治体の首長が公務の時間のほと

んどを使って特定の政党の活動を行うことは偏った政治的な行為ではないらしいが)役所が先頭に立って住民を守ることを考えずして、教師が子どもを守り正しいことを教えずしてなんとする。と思いませんか？

部落問題・人権教育・沖縄・在日朝鮮人の立場からいろいろなアピールや、展示、模擬店での交流がありました。

「救援関西」は、恒例のバレエで舞台参加しました。ダンスコアポシブルから小谷さんと幸さん、扶美子さん3人が新作「他にはなにも残っていない」を踊ってくれました。

死んだ男の残したものは、ひとりの妻とひとりのこども 他には何も残さなかった
死んだ女の残したものは、しおれた花とひとりのこども 他には何も残さなかった
死んだこどもの残したものは、ねじれた足と乾いた涙 他には何も残さなかった
死んだ兵士の残したものは、壊れた銃と歪んだ地球 他には何も残さなかった

わたしは、残されて死んでいくこどもの乾いた涙のところで泣きそうになります。

戦争の不条理・核による破滅を象徴的に歌った詩と音が、ダンサーの手足・肉体・視線と一体になって……一番前で真剣に見ていた小さい子どもたちにも伝わったようにおもいました。

ほんとうに、今度こそ核のない世界へ、みんなですすんでいきましょう！

(ながさわ)



文科省は、放射線「副読本」を撤回せよ！

12.2署名集約集会

「署名集約集会」が12月2日に若狭ネット・地球救出アクション・ヒバク反対キャンペーンの主催で開かれました。本来は、12月5日に政府交渉を行うように準備を進め、それに向けての集約集会の予定でしたが、衆議院の解散・総選挙となったために政府交渉は延期されました。

始めに主催者から署名運動のまとめが報告され、分かりやすい署名で撤回を求める運動のすそ野が広がったこと、福島に連帯しその現状を各地に広める手伝いをしていきたいこと、原発ゼロの運動をさらに広め原発運動を強めていきたいと決意を述べられました。「副読本」がフクシマ事故の深刻さを隠し、原発の延命を図るものである事をいち早く暴露したこと、全国各地から7万4155筆の署名が寄せられ、「副読本」の撤回を求める運動が広がったこと、その結果「副読本」の使用を中止した学校も多数あったこと、7月には1回目の署名提出を行い文科省と交渉を行なったこと、残念ながら撤回までは至らなかったが「副読本」の事業は「一部改善」となっていること、総選挙を挟むが年明けには政府交渉を成功させ副読本の撤回を迫っていこうと提案されました。

福島からの報告では、國分俊樹さん(福島県教職員組合)が「フクシマ事故」から20ヶ月経ったフクシマの現状等を報告されました。20ヶ月経って、時間の経過と共に原発に対する危機意識が特に西日本で低下している、風化している、フクシマ差別-被差別と加差別の現実、「福島原発事件」を公害問題として捉え、そして第三者はいないこと、また放射能による環境汚染により人間を生物学的にも社会的にも根底から破壊する、原発を早く無くさなければならないが、それでも今ある使用済み核燃料は無くならない、海洋汚染、食の問題、核廃棄物等多数の問題を話されました。また教師は中立という言葉に弱いが中立なんか有り得ない、「戦争中の教職員になりたくない」という意地と誇りがある」と言われた時には会場から大きな拍手が起こりました。

意見交換では、福島県での給食の現状についての質疑応答や署名活動を行なった報告、さらに憲法の平和的生存権、人権の問題、「原子力被災者等の健康不安対策に関するアクションプラン」などが取り上げられ実に活発な幅広い討論になりました。最後に「文部科学省が作成した放射線副読本に関する公開質問書」が議論されました。

フクシマ事故により被ばくといういわれのない苦しみを受け、そして今も放射能汚染地に住まざるを得ない人々に、さらに「風化」という名の追い打ちをかけるようなことは決してあってはならない、フクシマと連帯し、支援として何をすべきかと改めて問われた思いでした。(いのまた)



10月26日「反原子力デー」の日に他団体と関西電力に申し入れ行動をしました。しかし関電は申し入れに応じず、1階奥のスペースで極短く時間を限り、申し入れ書を読みあげたのは3団体のみで他団体は手渡すのみでした。その態度は本当に憤りを感じるものでした。その憤りを持って、恒例の金曜日の関電前抗議行動に参加しました。

関西電力社長 八木 誠 様

反原子力デーに際しての申し入れ

1986年の旧ソ連・チェルノブイリ原発重大事故から26年半が経ちます。放射能汚染と被ばくは長期に続き、子々孫々まで及びます。チェルノブイリ被災地では今も放射能の中で放射能と闘う生活を余儀なくされています。私たちが支援・交流を続けているベラルーシの汚染地でも、今でも、子ども達は少しでも被ばくの影響を少なくするために、汚染地外での保養に出かけています。野菜やミルク・肉類などの食品は全てモニタリングが行われ、放射能濃度が基準値を超えた食品は規制されています。住民の健診も毎年行われ、健康状態が登録され、管理されています。事故後甲状腺癌を含む甲状腺の病気が増え、全体的に心疾患・肺・泌尿器等様々な子どもの発病率が増えました。できるだけ被ばくを少なくすること、そして健康を守る努力が今も続けられています。「私たちの25年間の思い出は、全てチェルノブイリ事故と結びついています。」とチェルノブイリ被災者は訴えます。

フクシマ事故後1年7ヶ月経ちますが、未だ事故は収束せず、16万人余の人々が避難生活を強いられています。自主避難者は把握すらされていません。人々の健康管理さえ遅々として進まず、故郷を、生活を引き裂かれた被災者は苦悩の中にあります。「故郷を失うことはフクシマで終わりにして欲しい」というフクシマの被災者の訴えは心に突き刺さります。

貴社はあくまで原発を維持しようとしています。今夏「電力不足」を口実に大飯原発を再稼働させましたが、再稼働させなくても、節電などの効果もあり、電力不足は起きませんでした。また来夏も、たとえ2010年並の猛暑であっても、原発を追加稼働しなくとも「電力不足は生じない」と試算と報じられています。しかし貴社は「電力不足」が通らなくなると、今度は「電力料金値上げ」をチラつかせながら原発維持にしがみついています。しかしチェルノブイリ・フクシマはあまりにも多くの犠牲を払って、原発の途方もない危険性を私たちに示しました。いくら「世界最高水準」と豪語しても、貴社の原発も絶対安全とは言えません。また重大事故に伴う放射能汚染の拡大には防災対策は立てようもないことも明らかです。もう、原発はきっぱり止めて下さい。再生可能エネルギーに転換し、その拡大にこそ力を注ぐべきです。それが被災地の人々の思いに答える道であり、「原発ゼロ」を望む多くの国民の声に答える貴社の責任です。もうチェルノブイリ・フクシマを繰り返してはなりません。次のことを要請します。

- ・即刻大飯原発3・4号炉の運転を停止してください。
- ・原発の再稼働は断念し廃炉にしてください。
- ・再生可能エネルギーに転換しその拡大に努力してください。
- ・発送電の分離・電力自由化に協力してください。

チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

「救援関西」発足21周年の集い

チェルノブイリとフクシマを結んで
広げよう！支援と交流
フクシマを「核時代の終わりの始まり」に！

日時：12月16日（日） 午後1時30分～4時30分

場所：ドーンセンター5階／特別会議室

（地下鉄谷町線・京阪天満橋下車、徒歩5分）

* 26年目のチェルノブイリ現地訪問報告

* グループ討論（フリートーク）等

・フクシマから20ヶ月経った今と今後を考えるために、チェルノブイリのこれまでと今に改めて学び、伝える

・チェルノブイリとフクシマの交流を視野に入れながら、チェルノブイリ支援・交流を継続し、フクシマ支援・交流を考える。

☆どのように受け止め、考え、行動していったらよいのか、グループで自由に意見を出し合ひましょう。

** チェルノブイリ救援バザー

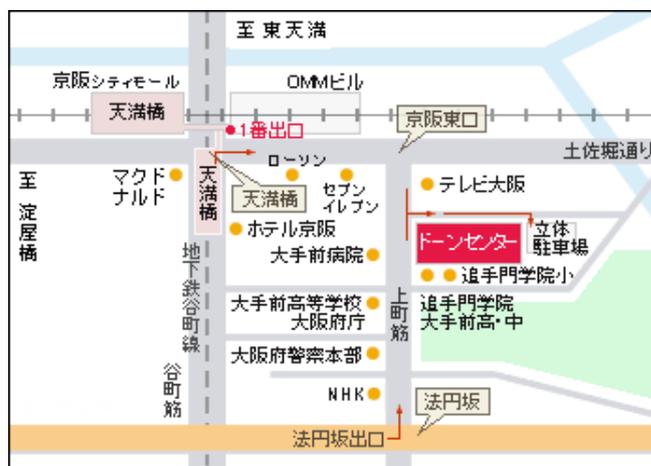
今回も購入したてのベラルーシの民芸品を販売します。是非御協力下さい！！



多くの皆様の参加をお待ちしています！

主催：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

問い合わせ：・ cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp ・ 072-253-4644 いのまた



ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

〒546-0031 大阪市東住吉区田辺 1-9-12 山科方

郵便振替：00910-2-32752